

1 1 キリスト教と近代世界 1 - 経済倫理 -

<問題>

富・財産は宗教的に肯定できるのか
人間はなぜ働かねばならないのか

1 1 - 1 聖書における富の問題

1. 預言者の富者批判・弱者の視点：正義＝神の下の平等
「災いだ、偽りの判決を下す者、労苦を追わせる宣告文を記す者は。彼らは弱い者の訴えを退け、わたしの民の貧しい者から権利を奪い、やもめを餌食とし、みなしごを略奪する」(イザヤ10：1-2)
2. 黙示文学：富める者の不正は、この世界の悪の支配の徴
終末・神の国ではこの秩序は逆転する
「わざわざいなるかな、きみたち富める者。きみたちは、自分の富を頼みとした。しかし、きみたちは、自分の富を失うであろう」(エチオピア語エノク94:8)
3. イエスの富者批判 神の国の現実
「貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」
「しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である。あなたがたはもう慰めを受けている」(ルカ6:20-25)
4. マリアの讃歌
「思い上がる者を打ち散らし／権力ある者をその座から引き下ろし／富める者を空腹のまま追い返されます」
「身分の低い者を高く上げ／飢えた人を良いもので満たし」(ルカ1:47-55)
5. 原始キリスト教会と愛の共産主義(財産の共有)
この歴史的事実性に関しては問題があるが、こうした理念が初期キリスト教会に存在していたことは注目すべきである
「信じた人々の群は心も思いも一つにして、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべて共有していた」(使徒言行録4:32)
6. キリスト教史における理念の現実化＝西欧世界の経済倫理の基盤
経済活動・富の倫理性
7. 「キリストに倣う」生き方、「ぶどう園労働者」の譬え(マタイ20:1-16)
8. 「能力に応じて働き、必要に応じて消費する」
宗教共同体内部の助け合いから、共同体外のすべての人間への助け
9. オスピス(hospice)、シュピタール(Spital)の歴史
市民の病院、救護所、施療所
金持ちの寄進と市民の自治

1 1 - 2 近代資本主義とキリスト教

10. まじめな労働の成果としての富も悪なのか？
なぜ人間は労働しなければならないのか？
11. 近代キリスト教における新しい職業倫理・労働観と資本主義の精神
両者の意図せざる逆説的關係（心理的作用）
12. ウェーバー・テーゼ
プロテスタントの職業観 カルヴィニズムの禁欲的エートス
資本主義の精神
資本主義の経済システム
13. ルター：
クレーシス：永遠の救いへの召し（宗教的生活）
ディアテケー：割り当てられた労働
Beruf: 世俗的労働 = 神によって与えられた使命
聖と俗の階層性の否定（万人祭司）
職業に貴賤なし、まじめさの意味がある

だから、人間は働くべきなのである
14. カルヴィニズム：予定説
神の選びにふさわしい生活 = 禁欲的エートス
生活の合理化
15. 資本主義の精神：勤勉、節約、正直、規律といった徳目によって構成された生活態度
資本主義経済の成立期にその担い手となった新興産業資本家はピューリタンであった。17～18世紀のイギリス・アメリカ
正当な労働に対する正当な報酬としての富は神からの恵みである
公正な市場経済は神の意志を実現するのにふさわしい
16. 資本主義と資本主義の精神との区別：カジノ資本主義
17. 世俗化と世俗主義
18. 職業生活の新しい意味づけの必要性
バブル期以降の時代における職業倫理・経済倫理の課題
公正さ（グローバル・スタンダード）と隣人愛（他者とともに生きる生き方）
19. 経済倫理と宗教、経済か環境か

<ブックガイド>

1. 芦名定道・土井健司・辻学 『改訂新版 現代を生きるキリスト教』（教文館）
芦名定道・小原克博 『キリスト教と現代 終末思想の歴史的展開』（世界思想社）
2. 梅津順一 『近代経済人の宗教的起源』（みすず書房）
3. トマス・アケンピス 『キリストに倣いて』（岩波文庫）
4. 田川建三 『キリスト教思想への招待』（勁草書房）
5. 金子晴勇 『近代人の宿命とキリスト教 世俗化の人間学的考察』（聖学院大学出版会）
6. 東方敬信 『神の国と経済倫理』（教文館）
7. 佐和隆光 『成熟化社会の経済倫理』（岩波書店）